

おかしな関係

有坂 広一

写真の同好会に入ったのは、恋人を見つけるためでもあった。が、そんな女は見当たらない。それどころか、田代良太はある女から嫌われている。その女は秋野美枝子で、何故なのか理由が分からない。もしかしたら、彼の風貌かも知れない。小男で美男子でも好男子でもなく、凡庸と言っている。自分に自信のない女というのは、とかく誰かを標的にして侮蔑の対象にしたがるものだ。秋野美枝子はどう見ても歪んでおり、何らかの闇を抱えているとしか思えない。

その日は、気持ちのいい風が吹き渡り、五月晴れの空には雲が二つ三つ浮かんでいる。谷根千散步やねせんにはもってこいの日である。さぞ、いい写真が撮れるだろう。集合場所の日暮里駅の構内で待っていたら、美枝子が姿を見せた。来た、来たと田代はいくばくかの緊張感を覚えながら近づいて行った。嫌われていても、コミュニケーションは大事である。皆の後から、「お久しぶりです」田代も挨拶した。するとどうだろう。

「あら、私、この人は初めて見るわ」美枝子は怪訝な顔つきをした。

「お目にかかっていますよ」

二、三度顔を合わせているし、名刺ももらった。意識してシカトしているにちがいない。ここで異議申し立てをしても始まらないから、黙って引き下がった。

フォト真昼の会の参加者九人が集まると出発である。田代も最後尾から付いていく。が彼は自分の存在を無視されて、むかついていた。表には出さないが自尊心は人並み以上に強い方だ。

「乙川さんから、手紙来る？」中年の女が隣の女に小声で聞いた。

「ええ、来るわよ」

「うるさいわね」

「毒にも薬にもならない文章で、面白くないわ」

「人はいいけど、どうもね」

その時、民家の二階から女のキンキンした声が響いてきた。ただちに男の反撃する胴間声。田代は思わず

耳を傾けた。

「貴方、暴力を奮わないでよ」

「お前なんか、殺してやりたい」

「警察を呼ぶわよ」

「呼びたければ呼べばいいよ」

女同士が「ひどいわね」と呆れたように顔を見合わせた。間もなく声は止んだ。

一団は段々と崩れ出した。

乙川広史が前の方から戻ってきて、「どう調子は」と話しかけてきた。

「上々だよ」

「田代さんは彼女、いたっけ」

「心に思っている女性はいるよ」

「どういう女なの」

「同じ会社でね、美人だよ」

勤め先は船橋の食品会社で、糸井七美という三十六歳のパート社員である。夫と別居中で話がつけば、正式に別れると言う。思慮深い性格で、色白で目鼻立ちが整い、美人の部類に入る。田代はどの程度本気か分からないが、しかし二人は落差があり過ぎる。たとえ田代が真剣でも七美はそんなに関心はなさそうに見える。

「結婚するつもりなの」

「相手次第だね」

「田代さんは、何となく女嫌いに見えるな」

「女は好きだよ。ただし、例外はある。秋野美枝子は問題外だ。乙川さんも嫌っているだろう」

「そんなことはないさ」

「でも、よく喧嘩するじゃん」

「戯れているだけだ」

「あの女はまともじゃない。あいつとセックスする奴がいたら、顔を見たいね」

「極論だよ。俺は抱いてもいいと思っている」

「物好きだなあ」

田代は美枝子のことを話題にするだけで血が上りそうになった。さっき、露骨に無視したのは許せない。しかし冷静にならなければと、話題をそらした。

「乙川さんはどうなの。恋人はいるの」

「いるよ。素敵な女性だから」

「お目にかかりたいね」

「いつか、紹介するよ。田代さんはびっくりするだろうな」

「会わせてほしいね」

乙川はそんな話を二、三分してから、また前の方に

戻って行く。バスツアーの仕事をしている吉田さんの案内のままに、皆は立ち止まってシャッターを押した。田代もデジカメをそここに向けた。学生時代は山登りが好きで、山ばかり撮っていた。社会に出て年も三十代後半になると、体がついていけなくなった。せめて街角を被写体にするくらいだ。このところ、仕事が多忙で会には欠席しがちだった。真昼の会に入ったのは八カ月前で、秋野美枝子とは同じ時期である。二次会の居酒屋で、美枝子が名刺を何枚か手にしているのを見て、肩書が目にとまった。

「私にも下さい」

所望したら、「どうぞ」美枝子は快く渡してくれた。名前の横に内科医・女流写真家となっていた。医師は本業だが、写真家と名乗るほどではない。しかも、わざわざ女流と断るのはどういうことか。どことなく世間知らずである。段々と彼女のことが分かって来た。医師といっても勤務医とか開業医とかではなく、時々集団検診を頼まれるくらいである。それに医師らしくない非常識な言葉を口にし、どきりとさせられる。会合の日、会員の一人が顔を見せなかった。誰かが仕事で出張していると話すと、秋野美枝子がすかさず口をはさんだ。

「彼、朝鮮人みたいな顔をしているわね」
一瞬、皆はハツとして沈黙した。

「そういう言い方、差別的ですよ」田代が注意した。美枝子は反論せず、太目の体をゆすって大声で笑った。自分が不利になった時、とかくオーバーなリアクションをする。また別の日、誰かの身体的な欠点を指摘した時も、同じようなことがあった。会員の一人から美枝子のことを聞いたことがある。医学部の学生の頃、付き合っていた相手の男が美枝子とのかかわりで自殺した。それが原因で精神に異常をきたし、今も尾を引いている。乙川とは気が合うのか、サークル活動以外にも付き合っている。機関紙のフォト真昼の会通信には、美枝子の誕生日にホテルで真紅の薔薇の花束を贈り、会食したことが記されていた。田代は、見るからに空漠とした宴だと白々しくなった。

「あの二人、できているのかな」

男たちは噂し合った

——根津公園でツツジを見て、千駄木駅界隈のレストランでボルシチを食べ、土産店で土鈴を一個買った。その間、誰彼となく言葉を交わしたが、美枝子とは一度も口を利かなかつた。美枝子には到底近づけそうもない。

次の日、会社で糸井七美に土鈴を渡したら、顔をほころばせて喜んだ。

「ありがとう、いい写真は撮れたの」

「まあね。今度七美さんを写してあげるよ。おふくろが見たがっていたから」

「人様にお見せするほどじゃないわ」

田代は間接的に意思表示したつもりだった。彼は相手の内面を知りたがったが、知る由もなかった。それから持ち場に向かった。機械の調整をしながら、七美のことが頭の中をよぎった。上背のない田代より身長があり、スマートで垢抜けしている。石山食品のパート主婦三十数人の中ではベストスリーに入る。もつとも大方の主婦たちは生活臭が漂い、皮膚が荒れ、疲れたような中年ばかりだが。

(七美さんはダントツだな)

田代は呟く。夫とはどうなっているのか知らないが、もつと積極的に出てもいい。そうすれば彼女の気持ちも固まって、本気で別れるかもしれない。田代にとつて子供のいないバツイチなら文句はない。

彼は石山食品に入る前は、大学で食品科学を専攻し、ジャム会社に就職して、十四年間務めた。辞めたのは、現場と事務サイドで対立が生じ、嫌気が差したからだ。

石山食品に入ってよかった。給料も悪くないし、社員として軌道に乗ってきた。後は結婚すれば人並みになれる。七美と何とかならないものか。連れて歩くだけで鼻が高い。乙川も羨ましがらう。機械に油を差し、準備は完了した。その後、他の所を見なければならぬ。人が足りなくてダシの素のミックスの手伝いがある。

三時休みの時、スマホのメールを開くと、乙川が何やら書いて寄越した。

《ぼくのフィアンセに真珠のネックレスを送ってやりました。きつと喜んでくれると思います》

田代は馬鹿げている、いい気なものだと思った。資産家の息子だから金で勝負できるものの、しかし実体は貧しい。だから少しも羨ましくはない。なんと行っても風貌は見栄えがしない。まだ四十前というのに、髪の毛は薄く、話すときは唇の端がグイと曲がる癖がある。お世辞にもハンサムとは言えない。しかし女には絶大な自信を抱き、自分の女性関係を自慢したがつた。後から会に参加した田代にシンパシーを感じるのか、よく声をかけて来た。

「田代さんの写真は異色だね。只者じゃない」

お世辞も心得ている。頭はいいが、精神的に成長し

きれない未熟な一面を抱え、仲間たちから超現実主義者などと言われている。何日かして乙川から手紙が来た。それはシュールそのもので、悪寒がした。到底まともではない。

《会のメンバーでは、田代さんに最も関心を寄せています。田代さんと私は同世代で、結婚を望んでいる点でも同じです。さて、今までいろんな分野の女性とお付き合いをして来ましたが、ここで真昼の会の女性について書いてみます。この間、山田真紀さんと二十時十五分まで語り合いました。お互いの写真を批評し合っている野見山カオルさんとはうまくいき過ぎて、旦那が怒り、彼女の日記を全部焼いてしまったそうです。藤井伊代さんとはほのぼのとした愛情で結ばれています。ます。

亡くなった緑川さんとは清らかな交際をし、忘れられませんか。

旧家の出の石井志保さんとは、ぼくを弟のように可愛がってくれます。彼女は退会しましたが、今も繋がっています。

なお、秋野美枝子さんとは、この頃、不協和音を奏でるようになりました。恐らく、将来を約束した女性が現われたから嫉妬しているのでしょう》

筆まめな乙川は海外旅行をすると、絵ハガキをくれ、《メアリーという女性と仲よくなりました》などと書いてよこす。父親の会社に勤めており、自由がきくのか、しばしば海外に出かける。手紙やメールは大方、女に愛される話ばかりだった。《バレンタインデーにはチョコレートを四十個もらいました》というのもあった。これでも国立の一流大学を卒業している。三流の私立で学費もアルバイトで賄った田代とは比べ物にならない。何かと差をつけられているが、ライバル意識はほとんど持っていない。あまりにも別格であり過ぎるからだろう。と言っても田代は自分のグレードを上げなければならぬと常に考えている。彼は本社の研究室で新製品の開発をするのが夢であった。今は船橋の工場全体に渡って見ている。このメインはインスタント麦茶でそのほかに油揚げの乾燥やダシの素の製造をしている。七美にも本社行きの話をし、

「ゆくゆくは、七美さんにもプロポーズするかもしれない」軽く告げたら、

「フフフ。田代さんって、冗談が好きね」

と躲かたされた。その時の流れで神保町に写真集を買いに行くと話すと、本の好きな彼女は、私も行ってみたいと関心を示した。

「いつでも案内するよ」

「その節はお願いね」

七美と気さくな会話が出来てよかった。多少でも田代の気持ちを汲み取ってくれば嬉しい。と言っても、まだまだ七美は手の届かない存在だった。

フोट真昼の会の二次会で喫茶店に立ち寄って雑談した。この会には中年の独身者が多く、時々結婚の話で盛り上がる。

「乙川さんは結婚の方は進展しているかい」誰かが聞いた。

「時間の問題だね。今年は勝負をかけるよ」

「でも、この人、結婚には不向きね。無理よ」

秋野美枝子が体をゆすって笑った。

「男に縁のない人に言われたくないね」乙川は言い返す。

「何言っているのよ。自分は幼児的な半大人なのに」

「そういう秋野さんはどうなの。欲求不満を持って余しているくせに」

「断っておくけど、私には恋人いるのよ」

「どうせ幻想の恋人だろう」

周りの者は興味しんしんと見守っている。ひところ

は、二人は不思議なほど親密だったが、今は不仲になったのか、子供じみた言い合いをよくする。

「あんた達は、一体どうなっているの」

「私達は、これくらいは朝飯前よ」

「秋野さんが、お冠なのは無理ないけど」

「二人はまた元に戻るよ」

「それはない、ない」

乙川と美枝子は声を合わせるようにして否定し、仲間を笑わせてから乙川は他に矛先を向けた。

「田代さんも好きな女性がいるんだから」

「だけど、俺は振られるかもしれない」

田代が冗談めかすと、美枝子がガラガラと笑い声を立てた。

「そんなにおかしいのかな」田代はムカツとした。

「まあまあ…」

「こんな世の中だから、結婚くらいしないと、存在感が薄らぐわ」と中年女。

「そうよ。世間は黙っているけど、独り者は認めていないのよ」

「俺も同感だね。不能者に見られかねないよ」

「要は普通に認められることが肝心です」

「乙川さんも結婚した方がいいわよ」

「ぼくは絶対にするから」乙川は強調した。

「貴方は自信満々だね」

「ぼくは着々と進めているよ。正式に決まったら、この会で、紹介させてもらうから」

乙川は大まじめな顔つきをした。また美枝子が大笑いして馬鹿にしている。

毎日、猛暑日が続き、日本はいまだかつてない夏になった。どんなに暑くてもくたばるわけにはいかず、田代は二時間ほど残業して社を出た。もう誰も残っていない。バス停でバスを待っていたら、反対側の歩道にトートバッグを下げた七美が目にとまった。田代は咄嗟に横断歩道を横切って、向こう側に渡った。七美は急いでいるのか早足である。そして彼女はバス通りから路地に曲がった。その辺りは人通りが少ないのか静かなところだ。五、六分歩いたろうか、五階建てのクリーム色のマンションに着いた。七美が建物の中に入ろうとした時、田代は追いついた。

「七美さん、ぼくです」

息急ぎで言った。彼女は不審げに振り返った。

「仕事の帰りだけど、七美さんを見かけたもんだから」

「びつくりさせないで」

「いや。そんなつもりはない。ただ話したくて」

「ダメよ。忙しいんだから」

「すぐに帰るから、心配しないで」

田代は失礼を詫びて、七美から離れざるを得なかった。彼は嫌われるのを恐れた。バス停に戻りながら、何故そんな行動をとったのか、自分でも理解しかねていた。間もなくバスに乗り込み椅子に座って悔やんでいる様子だった。がセクハラをしたわけではないから、そんなに深刻になることもない。彼は額から流れる汗を拭いた。いくら拭いても湧き出てくるようだった。

翌日、七美と顔を合わせ、いつもと変わらない挨拶をした。ついでに、「糸井さん、暇があったら、神保町に行こうよ」と誘った。

「ええ、考えておくわ」

「古本屋街を歩くと、発見があるよ」

「そりゃ、あるでしょうね」

七美は苦笑に近い笑みを浮かべた。迷惑なのかどうかはよく分からない。が田代はこれでいいと思っっている。案外、鈍感にできている。それとも図々しいのか。

もともと芯は強く、自分の出世にも積極的なほうだが。

暑い七月も終わったが、暑さは引くこともなかった。

台風が来るとの予報で、一週間ほどして珍しく雨が降

った。そんな時、乙川からメールが届いた。会社の昼休みに読んだ。

《恋人を紹介しますから、時間を作って下さい。田代さんも思召しの女性を連れてきたら、どうですか。デートの日は追って知らせます》

という内容である。その女性もお友達を連れて来なさいと言う。さらに二、三日して、スマホにかかって来、場所と時間を知らせてきた。待ち合わせ場所は田代の言い分を聞いてくれた。ただし、都合がつかなければすつぽかしてもいいことにした。彼は帰るまで七美に声をかけた。

「時間があつたら、付き合つて下さい」

出来るだけ無理強いないように言葉を選んだ。

「このところ、野暮用が多いから、何とも返事できないわ」七美は渋った。

「できたらでいいです」

「その時になってみないと、分からないわ」

「なるべくいい返事を待っています」

その三日後、神保町のKという喫茶店に入った。土曜日の午後で、田代はコーヒーを飲みながら、何となく冴えない表情をしていた。フレッシュな滲刺とした様子ではない。そんな時に七美からスマホがかかって

来た。

「夫が重要な話があると言うの。ごめんね」

「それは、残念だね」

田代はそう答えるしかなかった。

「じっくり話し合いたい」

「納得いくように話し合った方がいいよ」

「そうするわ」

「ちよつとだけお聞きしたいけど、ぼくのこと、どう思っている？」

「この間のことでイメージ変わったわ」

「そんなに？」

「怖いところがあるわ。思いつめているみたいなの……」

「でも、あれはほんの余興に過ぎないよ」

「私は冷静で紳士的な男性が好きよ」

話しているうちに田代はこんなことだろうと自分でも察しがついた。やつぱり距離があり過ぎるのだろうか。スマホを切った後、乙川と会うのが厄介になった。必ずしも約束を果たす必要はないからこのまま帰ってもいい。だが待てよ、せつかくだから、どんな女か見てやろう。あの男のことだから、ろくな女じゃないだろう。で、気持ちを切り替えて店を出た。

九段坂を上り、千鳥ヶ淵に向かった。堀に沿って歩

していると、前から三十四、五の女がやってくる。ブラブラした足取りで考え事をしている。手ぶらなのが奇異だった。淡いブルーのスーツが細身の体に似合っている。女優の何がしに似ているが、名前が浮かんでこない。女はすれ違いざまにふっと立ち止まった。

「こんなことをお願いして、何ですが」彼女は話しかけて来たのだ。

「何でしょうか」

「あの男からハンドバッグを取り戻してただけませんか」

「ハンドバッグを？」

「ええ、そうです」

「いいですよ」

田代は男らしく引き受けた。悪い気分ではなく、むしろ未知の綺麗な女に頼まれて、自尊心をくすぐられた。そして彼は三、四メートル先の円形の石のベンチに視線をやりながら歩き出した。その先に男が座っているのを見ると、知らない人物ではなかった。その特徴のある顔を見て、笑いそうになった。乙川がバッグを手に、うなだれていたからだ。思わしくない状況になっっているのだろう。笑いを抑えながら話しかけた。

「よお、お待たせ。俺、頼まれてね」

「どうしたって言うの」

「そう言わないで、渡してよ」

その時、背後で足音が聞こえ、香水の匂いが漂った。先ほどの女が田代を盾に立っていた。女は第三者がいるから安心したのか、強い口調でこう言った。

「バッグを返して下さい」

「いやだ」

「返さなきゃ訴えるわよ」

「預かっておくよ」

「返しなさい」

そんなやり取りを二、三度繰り返してから、乙川は手にしているものを仕方なく突き出した。これ以上抵抗しても無駄だと諦めたのだろう。女は素早く受け取った。

「乙川さん、さっきも申し上げましたが、これからは手紙や贈物はしないで下さい。ストーカーまがいの振る舞いもね。私は近々結婚するのよ。今日お目にかかったのは、はっきりさせたかったからよ」

眉が美しく、目が澄んでいる。言うべきことを言ったからか、女の表情は穏やかになった。田代は、立ち去ろうとする彼女をエスコートした。途中で、立ちどまって、

「申し訳ございませんでした。助かりました。」

女は腰を折り曲げた。上品な身のこなしは、容姿をいっそ引き立てた。

「バッグが戻ってきて、よかったですね」

「ええ、重ねてお礼を申し上げます」

見送ってから引き返し、乙川の横に座った。乙川は顎に手を当てて、ぼんやりと堀を見下ろしていた。池には二組の男女がボートに乗ってはしゃいでいる。

「残念だったね」

「田代さんは、どうしたの」

「俺も振られた」

「ふーん」

乙川は多くを語ろうとはせず、口を閉ざしている。けっこうショックだったようだ。

「おい、元気を出せよ」乙川の肩を叩いた。「素敵な女性じゃないか」

「自信はあったけどな」

「気にするな。それよりも軽く飲むかい。昼間からやっている店を知っているから」

「行くところがある。連中が、彼女を連れて来るのを待っているからさ」

「連中って」

「真昼の会の有志だよ」

「何、そんな約束していたのかい」

「秋野さんの発案だ。悪いけど、田代さんは外させてもらった。彼女はあんたが苦手だからさ」

「乙川さんが口添えしてくれてもよさそうだけどな」

「田代さんを友達だと思っているよ。だけどねえ……」

「分かったよ」

相手は医師だから隠然たる力を持っており、弁も立つから逆らえないのだろう。もつとも医師と言っても肩書だけで、まともに診察もできない。失墜して精神の変調をきたした女ではどうしようもない。

「そろそろ出かけるか」乙川が立ちあがった。

「俺も帰るよ」田代も立った。九段下駅に向かいながら、美枝子が陰で仕切っているのかと思うと、腹が立ってきた。忌々しい女だ。もつとも真昼の会に参加して秋野の顔なんか見たくなかった。何か言えば体をゆすって嘲笑するのは見るに堪えない。医師だったら、もつと毅然としていられないのか。

三カ月ほどして意外な知らせが届いた。乙川と秋野美枝子が結婚したと言うのだ。十月の半ばにハワイの教会で式を挙げた。田代は考えてもみなかった。十日

ほどうして乙川から電話があった。

「我々は結ばれたよ」乙川は満足している。

「あんたら、お似合いだな」

「そうかね。悪い気はしないけど」

「ぴったしだ」

嫌味の通じる相手ではない。

「それで、夜の営みの方は順調かね」田代は適当にか
らかった

「美枝子は体格がいいから、強いねえ」

「あんたも、いい体をしているもんな」

「お蔭さんでね」

美枝子の体つきは色気よりはタフネスのイメージが
あり、乙川の言う通り強そうだ。亭主の乙川も背が高
く七十五キロもあるからいい勝負である。

「毎晩かい」

「ご想像に任せるよ」

「いいなあ」

うまくいつているなら結構なことである。田代はも
うすぐに三十八歳の誕生日を迎えると言うのに、取り
残されるばかりだった。聞くところによると、七美は
七美でよりを戻し改めて夫と一緒に住むと言う。

せめて自分は写真くらい撮らうと、気合を入れた。

改めてフォト真昼の会の会長に電話で様子を聞いた。

「田代さんは、女医さんとうまくいつていないだつて
ね」

「変な具合になったよ」

「貴方のことを、噂していたね。田代さんは子供の頃、
自分をいじめた生徒に似ているとね」

「そんなこと、初めて聞いたね」

「新婚家庭にも、我々を全員を招いたんだけど、その
時も、田代さんの悪口を言っていたよ」

「いやな女だね」

田代は顔を醜く歪めた。彼は物事がうまくいかない
と、狭く考えて、心理的に自分を追い詰めるたちだつ
た。小1の時、近所の年上の女に悪さをされて、その
家の猫を鞭で何度も殴って、殺してしまった。近所で
噂になったくらいだった。

(危ない奴)

と囁かれた。そんなことまで思い出した。秋野美枝
子のことは出来るだけ忘れることにした。あんな女の
ことを思い悩んでも始まらない。ところである、好事
魔多し、好ましくない電話がかかってくるようになって
た。いや田代には朗報だった。

「このところ、喧嘩ばかりしていてね」乙川がぼやい

た。

「どうしたんだい」

「ひどいんだ」

幼いくらいに馬鹿正直な乙川は赤裸々に喋った。お互いに向きになって譲らないと言うのだ。特に美枝子の方がガンガンとまくし立ててくる。どっちかという
と、乙川の方が口下手だった。

「とにかく、一方的にやられている始末だ」

「それは困ったね」 田代は心から同情した。

「どうしたらいいのかね」

電話がかかって来る度に親身になってアドバイスをした。喫茶店で会って話もした。彼は相当参っているのか、ウイスキーのオンザロックをお代わりして飲んだ。

「飲まずにはいられないよ」

「乙川さんは、人がいいから、つけこまれるんだろう」

「だから、憎悪がたまってしまうよ」

「たまにはぶん殴ってやれよ」

「今にも手が出そうになる。それを抑えているんだ」

「俺だったら、黙っていないで、手を出すよ」

「田代さんなら、やりそうだね」

「ああ、もちろんだ」

「頼もしいね」

田代はコーヒーの残りをすすり、乙川はまたロックのお代わりをした。田代までが興奮したのか、ジツとしていられなくなった。

「思い切って、強烈な一発を食らわしてやればいい」

「さぞ、気分いいだろうな」

「だから、早く実行しなよ」

田代はもどかしくなった。が、この種のことには急かさないうで徐々に仕向けていくのがいい。二人は憎しみをたぎらせながら、二時間は喋った。店を出ると、乙川は何かやりそうな雰囲気になっていた。二、三日して、電話がかかってきて、

「俺、とうとうビンタを食らわしてやった。泣きそうになったよ」

「そうだろう、それでいいんだよ」

「男らしいところを見せてやった。すかつとした」

「そう来なくちゃ嘘だ」

「でも、奴はひどいことを言った」

「何か言ったのかね」

「低能とか、短小とか、禿とかね。医者のかせに信じ

られないほど下品だ」

「あの女の言いそうなことだ」

「人の生まれながらの弱点を指摘するなんて、最低だ」
恥も外聞もない女に乙川はよほど怒っているらしい。
そして乙川の暴力は日に日にエスカレートして、歯止
めが利かなくなっていた。

「弱気にならない方がいい。がんばれよ」

「あいつも手を出すようになった」

「女の力なんて、知れているよ」

「両方で血を流すことがある」

「そこまで来たら、トドメを刺すしかないだろう」

「俺も引くに引けないよ。負けたくない」

話し終わると、血を流している美枝子の醜い姿を想
像した。半月ほどしたら、乙川からまたかかってきた。
電話はことのほか悲痛だった。田代は受話器を耳に強
く押し当てて聞いた。

「とうとう、来るところまで来たよ」

「別れちゃえばいいよ」

「そうなるだろうな」

夫婦の抗争はそれだけでは収まらなかつた。さらに
ひどい事態に発展し、新聞の社会面にも報道された。
田代は食い入るように読んだ。

——DV夫が殺害容疑 東京練馬区

練馬区二丁目の会社員乙川広史（39）から妻を殺し

たと110番通報があつた。被害者は妻であり、医師
の美枝子（42）さんで病院に搬送されたが、間もなく
死亡した。警視庁練馬警察署は乙川を殺人未遂の疑い
で現行犯逮捕した。捜査は殺人に切り替えて送検する
方針。乙川広史は「殴っている時、つい力を入れ過ぎ
て殺してしまった」と供述している――

「気の毒な女性だな。どうしようもないな」

田代は呆れながら呟くだけだった。

みなせ49号 2011年2月号 妙なライバルと

その妻 初稿